

秋田大学

国際交流センターニュース 第8号

Akita University International Exchange Center News

2012年3月10日発行

発行者： 国立大学法人秋田大学国際交流センター 〒010-8502 秋田市手形学園町1-1
<http://www.pcix.akita-u.ac.jp/inter/> 電話：(018) 889-2856 kokusai@jimu.akita-u.ac.jp

- ・ケミ・トルニオ応用科学大学訪問 (1)
- ・秋田大学海外留学説明会 (1)
- ・秋田の冬の行事体験旅行「なまはげ柴灯まつり」(2)
- ・年末恒例のもちつき大会 (2)
- ・蘭州大学の劉宏書記、劉振宇先生が秋田大学を来訪 (2)
- ・私の初スキー (3)
- ・「留学生とランチ」で盛り上がる (3)
- ・多文化間交流を实践 (3)
- ・専任教員からひとこと 牲川波都季 (3)
- ・秋田大学研究者海外派遣事業成果報告会 (4)
- ・ハンパット大学・尹在石日本語学科長が留学生と懇談 (4)
- ・秋田地域留学生等交流推進会議 (4)

○ ケミ・トルニオ応用科学大学訪問

● より充実した交流を目指して……………市嶋典子

11月27日から1週間、秋田大学の協定校であるフィンランドのケミ・トルニオ応用科学大学に、医学系研究科の米山奈奈子教授、教育文化学部の宮野泰征准教授とともに訪問しました。今回の訪問の大きな目的は、1. 研究者、学生交流の促進、2. 教育機関、施設の視察、3. 秋田大学留学説明会実施の3点でした。訪問の結果、秋田大学医学部保健学科とケミ・トルニオ応用科学大学の看護学科との研究者交流が決まりました。現在、秋田大学から2名の学生が



ケミ・トルニオ応用科学大学に留学しています。また、ケミ・トルニオ応用科学大学の3名の学生が、秋田大学に留学することも予定されています。今後も両大学の活発な交流が継続するよう、支援していきたいと思っています。

(ICHISHIMA, Noriko — 国際交流センター)

● ケミ・トルニオ応用科学大学に見る交流活動…宮野泰征

去る11月27日から12月3日にかけて、フィンランドのケミ・トルニオ応用科学大学を訪問しました。4学部構成の小規模な大学ですが、ラップランド・ユニバーシティ・コンソーシアムとの交流を母体に、精力的な大学運営が展開されているとの印象を得ました。国際交流活動も非常に活発で、在学生に占める留学生比は10%超とのこと。留学生は、欧米圏にとどまらず、アフリカ、アジアなど非常に国際色が豊かな印象でした。秋田大学からも2名(訪問時は1名)の交換留学生在籍しています。滞在期間中、学生自治会主催のフィンランド独立記念式典が留学生を対象に開催されました。フィンランドの歴史、ダンス、音楽などの文化を、余興を通じて楽しく学べるよう配慮されていました。大学の交流の精神はここにもしっかり活かされているようでした。

(MIYANO, Yasuyuki — 教育文化学部環境情報講座)

● 研究者交流の可能性を探る……………米山奈奈子

保健学科の国際交流事業を新たに展開するための足がかりを作るという重要な使命を持って、初めてケミ・トルニオ応用科学大学を訪ねました。複数の知人から、フィンランドは教育熱心で男女平等が進んでいる、森と湖が多く自然に恵まれた美しい国、一方で自殺率の高い点が秋田と似ていると聞いていました。

実際訪ねてみると、治安もよく、一見ぶっきらぼうのように見えますが、ちょっとシャイで、真面目で堅実な国民性がうかがわれて親しみを感じま



した。大学の教授陣も我々を歓迎してくださり、具体的な交流に向けて布石を置くことができたのではないかと思います。大学をあげて諸外国からの留学生を受け入れていることが、学生にとって刺激的な教育環境を提供することに繋がっているように感じられました。(YONEYAMA, Nanako — 医学系研究科保健学専攻臨床看護学講座)

写真：保健・社会福祉学部の先生たち(中央が学部長)

○ 秋田大学海外留学説明会

11月10日に秋田大学の学生を対象とした海外留学説明会を開催しました。説明会では、留学の手続きの概要、奨学金、TOFFL試験などに関する詳細な情報を提供しました。質疑応答では、学生から、留学制度や英語の勉強方法等に関する具体的な質問が相次ぎ、説明会参加者の留学への関心の高さがうかがえました。秋田大学生の海外留学者数は年々増加しています。大学側には、より充実したサポート体制が、学生側には、周到な留学準備と強い留学への問題意識が求められます。



(市嶋典子：ICHISHIMA, Noriko — 国際交流センター)

● 秋田の冬の行事体験旅行「なまはげ柴灯まつり」

ベトナムからの留学生のホアン・バン・チンです。3年生の私に対して秋田のナマハゲのような有名物を各イベントでは見たことがよくありますがナマハゲの伝説は何かなぜナマハゲが生まれたのかが分かりませんでした。今度期末試験勉強の休憩としてなまはげ柴灯まつりを他の留学生たちと体験して楽しみたいと思いました。

午後1時30分出発して、1時間半弱バスがなまはげ館に着きました。ここではなまはげの貴重な資料の数々が展示されています。なまはげ変身コーナーがあって、履いてみたら合うといわれて案外と面白かったです。その後、男鹿



真山伝承館で学習講座としてナマハゲの実演が行われて、家中を暴れまわるナマハゲを身近に見ることができてその迫力を感じられました。ホテルでの食事が終わってから祭りの会場に行きました。ここでは雪が軽く降る季節で柴灯火に近く立って竹コップの真山の甘酒を飲みながらなまはげの踊りを楽しむのはすごく良い雰囲気でした。最後に雪で真っ白な山道を、松明を掲げて下りてくるなまはげの姿は大変幻想的でした。

久しぶりに祭り行って疲れましたがすごく楽しかったです。(ホアン・バン・チン, HOANG, Van Tien — 工学資源学部情報工学科3年)

● 年末恒例のもちつき大会

12月22日、大学会館の食堂で餅つき大会を実施しました。この行事は、留学生に餅つきやお供え作りなどを体験してもらい、日本の伝統文化に触れるとともに地域の皆さんとの交流を深めることを目的に毎年実施しています。今回は10回目の開催でした。当日は留学生や地元の三吉南町・田中・大沢の各町内会の方々を含む約70名が参加し、餅つきやお供え作りを体験しました。実際に杵を持つてみると思ったよりも重く、留学生も苦戦していましたが、餅をつく掛け声やつき手と返し手の息の合った姿を見ながら、共に汗を流し日本文化を体験しました。

(西田文信：NISHIDA, Fuminobu — 国際交流センター)

● Mochitsuki Experience.....パターンソン・ジェフ

オーストラリアには餅つきのような伝統的な行事がないので今回始めて体験してまたやりたいと思いました。この体験を通してより日本の文化を少し理解できたような気がします。子供から年配の方までこの行事に参加しており、日本の伝統的な文化は年齢に関係なく人々に根付いていると感じました。僕のような留学生がたくさん参加していて餅つきを楽しんでいました。この行事は僕たち留学生にとって日本での忘れられない思い出になると思います。I would like to learn more about Japanese culture, society and the language.



(PATTERSON, Jeff — 教育文化学部特別聴講学生)

● 蘭州大学の劉宏書記、劉振宇先生が秋田大学を来訪

● 遠隔会議システムの利用を協議.....牲川波都季

12月19日から21日まで、中国の蘭州大学外国語学院から、劉宏書記と日本語専攻科の劉振宇先生をお招きしました。蘭州大学は本学の大学間交流協定校であり、2010年度からは学部学生の交換も始まっています。今回の招聘では、遠隔会議システムによる授業見学や教職員の相互派遣など、



交流を発展させるための方策について協議しました。また、蘭州大学出身の交換留学生5名との面談や日本語授業への参加、留学生宿舎の見学などを通じて、留学生の勉学・生活の現状を確認していただくことができました。

(SEGAWA, Hazuki — 国際交流センター)

● 教育文化学部長と懇談.....内田昌功

21日には教育文化学部長と懇談し、これまでの交流の成果を確認するとともに、今後のさらなる発展について意見交換を行いました。劉書記のお話で興味深かったのは、中国で海外留学を希望する学生が近年さらに増えているということです。蘭州大学でも協定校との関係や留学支援の体制を充実させ、将来はもっと多くの学生を日本へと送り出したいとおっしゃっていました。背景にはグローバル化の中で高成長を続ける中国経済と外国への関心の高まり、また就職をめぐる厳しい競争があるようです。秋大からも蘭州への留学生が増え、交流がいつそう活発になることを願います。なお劉書記は今回が初の訪日で、秋田の雪の多さに驚かれていました。(UCHIDA, Masanori — 教育文化学部日本・アジア文化講座)

私の初スキー

アンニョンハセヨ！ 私は韓国のハンバット大学から来たイ・ジョンヒョクと申します。私は今年2月18日から19日の2日間、外国人留学生スキー合宿研修会に参加してきました。スキーを習ったことのない私にとってとてもいい機会でした。出発の前日は眠れないくらいドキドキしていました。

いよいよスキーキャンプの日が明けました。空からはたくさん雪が降っていました。普段ならあまりにも降りすぎてイヤだと感じる雪



ですが、あの日はとても嬉しく感じました。スキー場に到着して食事をし、いよいよスキーを教えてくれる先生たちに会いました。秋田で出会える普通のおじさんのようにとても親切な方々でした。基本姿勢からとても詳しく説明してくれました。そのお陰で最初は何も出来なかった私が、どんどんすべれるようになりました。あの夜は祭りもありました。雪で作られた美しい造形物がとても素敵でした。冬に見る花火もとても美しかったです。

2日目には結構楽しく出来るレベルになりました。私はスキーのその楽しさにすっかりはまってしまい、帰り時間になるにつれてとても悲しい気持ちになりました。修了式を終えて帰るバスの中で「来年また秋田に来てスキーをしたい！」と思いました。(李鍾赫：LEE, Jonghyeok — 教育文化学部特別聴講学生)

「留学生とランチ」で盛り上がる

1月24日、火曜日の昼休み、一般教育1号館2階にある多文化交流ラウンジで「留学生とランチ」を開催しました。留学生と日本人学生が一緒にお昼ご飯を食べながら交流を深めることを目的に開いたところ、留学生約10名、日本人学生約10名の参加がありました。簡単な日本語でおしゃべりを楽しんだり、留学から戻った日本人学生が、英語や中国語で留学生と会話する姿もみられ、とても盛り上がっていました。



多文化交流ラウンジでは、今後も様々なイベントを開催していきたいと思います。皆さんの積極的な参加をお待ちしています。(国際交流課)

多文化間交流を実践

2011年度北東北国立3大学合同合宿研修が、青森県いわき青少年スポーツセンターにて11月26日から1泊2日で行われ、岩手、秋田、弘前の北東北国立3大学に所属する留学生と日本人学生計86名が集いました。椅子取りゲーム、名前覚えゲームなどのアイスブレイクや、「希望」を身体で表現するジェスチャーゲームを行って交流を深めた後、写真



1枚を手掛かりにキーワードを入れた「紙芝居作り」に17チームに分かれて挑戦しました。学生一人一人が想像力を駆使し、チームワークで完成させた作品は、どれもユニークで楽しいものばかりでした。

この合宿は、多文化・多言語状況で課題に取り組み、多角的視点から物事を見る経験をすることを目的として過去6年にわたって実施されており、参加学生には大好評です。(宮本律子：MIYAMOTO, Ritsuko — 副センター長、教育文化学部国際コミュニケーション講座)

専任教員からひとこと 牲川波都季

先日『戦後日本語教育学とナショナルリズム』（くろしお出版）を上梓した。戦後の日本語教育学は、学習者に対し、日本人と同じになれ、かつ異なれ、というメッセージを発し続けてきた。そのメッセージの実態と論理、そして問題点の解明を試みたのが本書である。

さて、2012年度には、文部科学省によるグローバル人材育成推進事業の公募が予定されている。グローバル人材育成推進会議の「中間まとめ」（2011年6月22日）によれば、グローバル人材の一要素は「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー」だという。他方で、この推進会議の前身は、「産学官による」グローバル人材育成推進会議という名称だった。グローバル人材の育成が、日本人のアイデンティティーを確認させ、日本の産業・経済発展に資する人的資源の育成を目指しているのだとすれば、そうした目標とグローバルという概念はどのように矛盾なく結び付くのか。東日本大震災の後に、修復ではなく発展の主張。メッセージの意図を解釈しつつ、自分自身の投企の在り方を考えたい。

(SEGAWA, Hazuki — 国際交流センター)

秋田大学研究者海外派遣事業成果報告会

2月15日一般教育1号館で、2010年度採択の研究成果が報告されました。上田由紀子准教授（教育文化学部所属、アメリカ・マサチューセッツ工科大学で研究に従事）と和嶋隆昌助教（工学資源学研究科所属、アメリカ・マイアミ大学地質学部で研究に従事）により、滞在先地域の特色・キャンパスの雰囲気、派遣先での研究内容等、素人にも配慮した内容で発表が行われ、質疑応答も活発に行われました。（国際交流課）

● 人間言語の普遍の仕組みを探究する……上田由紀子

秋田大学研究者海外派遣事業により、2011年2月1日から9月26日の8か月間、マサチューセッツ工科大学（Massachusetts Institute of Technology）で、理論言語学の一つである「ミニマリスト・プログラム（Minimalist Program）」と呼ばれる言語理論の枠組みを使い、「人間言語の仕組み」、特に、CP領域（言語理論上、文タイプを指定したり、文外の情報との接点として機能すると言われていた統語領域）の研究を「一致現象（AGREE）」の観点から研究してきました。

私の採用している言語理論は、MITのノーム・チョムスキー（Noam Chomsky）氏が1950年代に提案した理論の流れをくむもので、人間言語が共通に持つ普遍の原理・特性を明らかにしようとするものです。物理学が自然界の原

理や法則を見つけ出そうとするのと同様に、人間言語も自然物の一つとしてとらえている点が、この学問の特徴的なところでは。MITでも、この人間が生まれながらに無意識に持つ、（脳内に）内在された言語生成のアルゴリズムを発見・記述し、そこに働く原理や法則の存在を証明しようと世界中から研究者が集まり、様々な言語を使って盛んに研究を行っています。

また、人間言語の仕組みの解明は、近年、様々な研究分野とのリンクが期待されています。1990年代からは、脳科学との共同研究でfMRIなどを使って、提案された言語理論の妥当性を検証しようとする試みも盛んに行われる様になっています。MITにも言語と認知と脳研究を繋ぐ巨大な研究施設（Brain & Cognitive Sciences）があり、私も被験者となって、実験にも参加してきました。（UEDA, Yukiko — 教育文化学部国際コミュニケーション講座）



写真：言語哲学が入っている研究棟，Ray and Maria Stata Center

● ハンバット大学・尹在石日本語学科長が留学生と懇談

大学間協定校のハンバット大学（韓国）から、日本語学科長・尹在石教授が本学を訪問されました（1月12日・13日）。尹教授は、ハンバット大学からの留学生6名に会い、学業・生活の現状、帰国までそして帰国後の目標などについて懇談されました。

ハンバット大学からこの4月に受け入れる留学予定者数は、2001年の協定締結以来もっとも少ない1名です。尹教授によれば、福島原子力発電所の事故の影響が大きいとのことですが、その1名の新留学生は、ハンバット大学からの受け入れ留学生としては、記念すべき100人目となります。尹教授は、冬の秋田の静けさに感嘆し、再来年度から再び相当数の留学生を派遣したいと繰り返し要望されました。本学としても学生が戻ってくるよう、勉学・生活環境向上に引き続き取り組んでいく必要があると考えます。

（牲川波都季：SEGAWA, Hazuki — 国際交流センター）

● 秋田地域留学生等交流推進会議

2011年度秋田地域留学生等交流推進会議が12月16日、カレッジプラザを会場に開催されました。議長である吉村学長から挨拶のあと各委員から自己紹介があり、その後文部科学省高等教育局学生・留学生課留学生交流室の長川専門官から、2012年度の文部科学省概算要求のうち留学生交流を中心とした高等教育に関わる部分についての説明、及び各地域における留学生等交流推進会議の現状と震災後の留学生への対応について報告がありました。

また各委員からは所属機関ごとの留学生交流事業の報告や、地域の国際交流団体による交流活動について報告があり、今後の活動・支援や会議運営について意見が出されました。

会議終了後は場所を移して会議構成員と秋田大学・国際教養大学・秋田県立大学・秋田工業高等専門学校の留学生との懇親会が行われ、参加した留学生全員からのスピーチを交え和やかな雰囲気の中交流が行われました。

（笹村和雄：SASAMURA, Kazuo — 国際交流課長）

秋田大学の留学生数 2011年度後期

▶ 学部生：91名 ▶ 大学院生：38名 ▶ 交換留学生・研究生等：46名 **計：175名**